

【論文】

介護老人福祉施設および介護老人保健施設における 移動展示の試み

Outreach activities of the Cattle Museum at long-term
care health and welfare facilities for the elderly

川田 啓介* 黒澤 弥悦* 阿部 正勝*
高野 教導** 岩渕 亜希** 兼松 重任*

Keisuke KAWADA Yaetsu KUROSAWA Masakatsu ABE
Kyodo TAKANO Aki IWABUCHI Shigeto KANEMATSU

Abstract:

The Cattle Museum has engaged in outreach activities at twelve nursing homes for the aged over a seven-year period. The present report considers the influence of our exhibitions on residents.

In general, nursing facilities wished to have such traveling exhibitions during winter, when residents have few opportunities to get out. In deference to resident health, Cattle Museum staff was vaccinated against influenza prior to the exhibitions.

On a scale of 1～5, mean resident interest (and standard error) in the various exhibitions was as follows: the bovine stomach $4.6(\pm 0.27)$, cattle bells $4.2(\pm 0.42)$, historical farm and ritual implements $2.8(\pm 0.42)$, bison fossils $2.4(\pm 0.27)$, and color woodblock prints (*nishiki-e*) 1.0. This indicates that interest in the first two was significantly higher than that for the remaining three. Residents responded most positively to the exhibits which they had never seen before, but had some concept of. They were also fond of exhibitions that were nostalgic, reminding them of good memories of the old days. Residents were more interested in exhibits that simultaneously appealed to multiple senses, such as sound and touch. On the other hand, they were less interested in exhibits which were hard to understand for reasons including their own historical backgrounds. It might be speculated that collections including that of farming implements (toward which interest was shown), could be employed as a sort of reminiscence therapy for some residents.

* 前沢町立牛の博物館

** 前沢町立牛の博物館元職員

はじめに

博物館、特に公立の博物館は「学問の自由」・「教育を受ける権利」・「勤労の権利」を法の下での平等に基づいて国民一人一人に保証する機関とされている（邊見 1993 pp. 5-17）。しかし、自ら博物館に足を運ぶことのできない介護老人福祉施設および介護老人保健施設（以下、介護保険施設）の入所者にとっては、各施設が博物館への見学のための事業を企画しないかぎり、博物館に行くことはまず不可能と言っていい。また、介護保険施設が来館する場合は、移動が困難な寝たきりの人などは対象外となるのが一般的である。

イギリス、オーストラリアおよびカナダでは高齢者の博物館利用プログラムが早くから作製され、それが実践されてきたが、我が国ではほとんど見られないのが現状である（安井 2000 pp. 20-25）。さらに、小中学校における2002年4月の学校週5日制と総合的学習の時間の完全実施を受け、博物館と学校教育との連携は数多く討議されているものの介護が必要な高齢者の博物館利用に関する研究はごくわずかである。

牛の博物館（以下、牛博）では、学校などの教育施設への移動展示のみならず、博物館の利用弱者として検討が遅れていると考えられる介護保険施設において、1997年～2002年にわたって合計12施設への移動展示を試みてきた。そこで本論文はその結果について報告し、当館所蔵の資料が介護保険施設の入所者にどのように受け入れられたのかについて結果をもとに分析し、考察を行ったものである。

1. 事業実施の経緯

牛博は、岩手県前沢町立の公立博物館であり、その基本理念に「①豊かな地域文化を創る博物館、②参加型・体験型の博物館、③憩いの場・交流の場としての博物館」と明記されている。これを受けて、開館初年度にあたる平成7年（1995）に牛博職員による教育普及事業の検討を行い、次年度からの移動展示の実施を決定した。事業の実施対象は、普段、博物館に足を運ぶことが難しい介護保険施設の入所者とした。これは、町内の小・中学生および高校生は自力で来館することができると判断し、学校以外で移動博物館の受け入れ先を検討した結果、ごく自然に決定したものである。

2. 事業の概要

2-1 対象施設および実施時期

牛博が位置する岩手県は15,278km²と北海道に次ぐ面積を有しており、町立の博物館が県全域を対象とするには限界がある。このことから、移動展示の実施の対象は、岩手県南部に位置し、前沢町と広域の行政圏を共にする水沢市、江刺市および胆沢郡内の町村、いわゆる胆江行政区と前沢町に隣接する平泉町の計7市町村に設置されている18ヶ所の介護保険施設（介護老

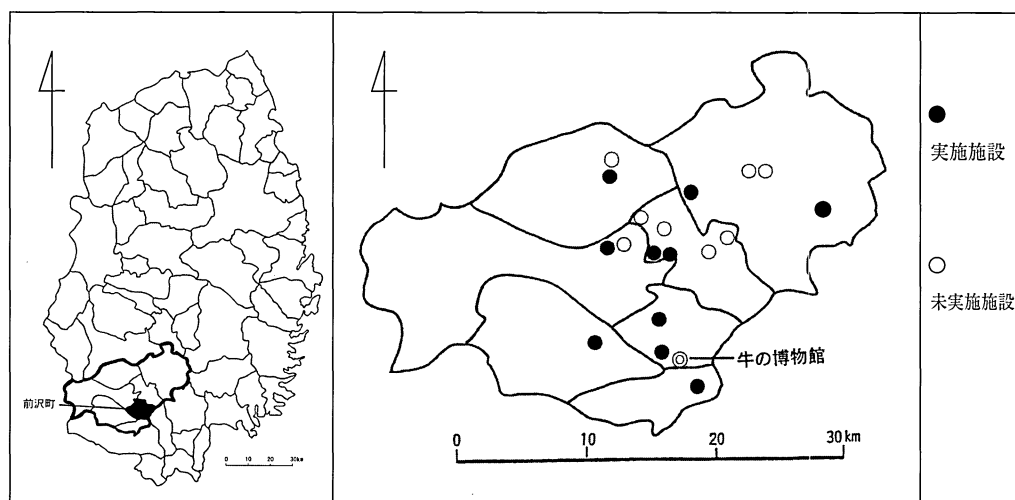


図1 事業対象施設の位置

人福祉施設9・養護老人ホーム2・介護老人保健施設7)とした(図1)。これらの施設は、日帰りで事業が実施可能な範囲にあり、最も遠い施設は牛博から33.6kmのところにある。このことは、町立の博物館が町の範囲を越えて事業を展開していることになるが、牛博は町立の施設でありながら外部に向かって情報を発信できる施設として町民に受け入れられている。また、館の設立の動機やその性格上、地元の特産品であり、牛肉の高級ブランド化に成功した黒毛和種、いわゆる「前沢牛」のPR館としての使命を有していることから、この事業を実施するにあたっては、町当局の理解が得られている。

移動展示は、開館の次年度にあたる平成8年度(1997年2月)から平成13年度(2002年2月)にわたり、計12施設において実施した。実施年月日、施設規模および場所は、表1に示したとおりである。初年度の実施においては受入施設を前沢町内の介護老人福祉施設に相談して決定したが、次年度からは博物館側から打診して受入可能な近隣市町村の介護保険施設において事業を実施した。なお、本事業は平成14年度以降も引き続き実施する予定である。

実施時期は、当初、博物館の休館日(くん蒸期間)に合わせて行うため2月の下旬に定めた。これは本事業の開始当時、博物館ボランティアの会がまだ設立されておらず、当館の職員全員〔7名:常勤3名(学芸員2、事務1)、非常勤2名(館長1、研究員1)および臨時職員2名(受付2)〕で事業に取り組む必要があったことがその理由である。平成9年度からは、設立されたボランティアの会(キャトルサンク、会員26名)による3~4人程度の補助があり、さらに資料の選定や展示方法などがシステム化されたことから開館日に少人数〔3名:常勤2名(学芸員1、事務1)、非常勤1名(館長1)〕で移動展示を実施することが可能となった。

施設名	実施年月日	収容人数	職員数	延床面積	実施場所
介護老人福祉施設 聖愛園	1997年2月20日	80+ (24) 人	60人	3,652m ²	食堂
介護老人福祉施設 まえさわ苑	1997年2月21日	50+ (10) 人	45人	2,368m ²	食堂
養護老人ホーム 江寿園	1998年2月27日	55+ (16) 人	19人	1,387m ²	娯楽室
介護老人福祉施設 羽衣荘	1998年2月27日	50+ (113) 人	43人	2,934m ²	食堂
介護老人保健施設 ハイム アザレア	1999年2月18日	88+ (20) 人	45人	3,020m ²	娯楽室
介護老人保健施設 さわなり苑	1999年2月19日	75+ (15) 人	50人	3,214m ²	機能訓練室
介護老人福祉施設 友愛園	2000年2月16日	55+ (15) 人	28人	1,770m ²	デイサービスルーム
介護老人福祉施設 立生苑	2000年2月17日	55人	29人	1,344m ²	大広間
養護老人ホーム 寿水荘	2000年2月17日	77人	21人	2,145m ²	大広間
介護老人福祉施設 福寿荘	2001年2月26日	130+ (30) 人	104人	7,588m ²	ホール
介護老人保健施設 清和苑	2001年2月27日	80+ (30) 人	40人	3,774m ²	多目的ホール
介護老人福祉施設 やまゆり荘	2002年2月22日	60+ (30) 人	30人	2,398m ²	機能訓練室・ホール

() 内は、短期入所者

表 1 移動展示実施施設

2-2 展示資料

分類	資料名	点数
①新たな発見につながる資料	バイソン (Bison antiquus) 頭蓋骨化石	3
	バイソン (Bison priscus) 頭蓋骨化石	1
	大判錦絵 東海道五十三次 大津(初代歌川広重) 東都三十六景 高輪海岸(二代歌川広重) 役者絵 三枚続き(三代歌川豊国) etc.	20
②自分の経験に照らして理解しやすい資料	犁(高北式双用犁)	1
	馬鋤	1
	ガウンガウン祭り祭具(鹿児島県串木野市)	6
③知識として知っているが見たことのない資料	牛の胃高級アルコール含浸標本	1
	牛の胃(1~3胃切片)シリコン含浸標本	3
④見る・聞く・触れることの出来る感覚に訴える資料	牛鈴	60
	スイス、スペイン、ドイツ、ベトナム、インドネシア、ネパール etc.	
資料合計点数		96

表 2 移動展示に用いた資料

移動展示に用いた資料は表 2 に示すように、①新たな発見につながる資料、②高齢者が自分の経験に照らして理解しやすいと思われる資料、③知識として知っているが見たことのない資料、④見る・聞く・触ることができる感覚に訴える資料の 4 つの視点から選んだ。すなわち、バイソン (Bison antiquus, Bison priscus) の化石、ウシの胃高級アルコール含浸標本などの生物系資料と犁や馬鋤などの古農機具、ガウンガウン祭り祭具一式、錦絵および牛鈴などの民俗系

資料のあわせて96点である。この他、2月中に開催していた企画展関連の資料を随時追加した。

2-3 展示方法

会場は、実施する介護保険施設の食堂、娯楽室および機能訓練室など入所者全員が集まることが可能な場所を使用した。これらの会場は、食事や訓練および介護保険施設独自の事業に日常的に使用されていることから、移動展示は限られた短い時間の中で行う必要があった。また、実施においては、長時間の拘束が入所者を疲労させると考えられたことから、30分程度の説明の前後に自由見学を30分ずつ設けて合計1時間30分以内とした。

参加者の中には車椅子の人やベッドで寝たきりの人もいたことから、参加者と展示物との距離が遠くならないよう会場を横に広く使用した。また、椅子や車椅子それにベッドは、博物館職員や補助として参加したボランティアが歩いて入り込めるだけの隙間を空けて配置した。すなわち、基本的な配置は図2に示したような対面式である。本事業のための机や音響設備は、介護保険施設のものを借用した。

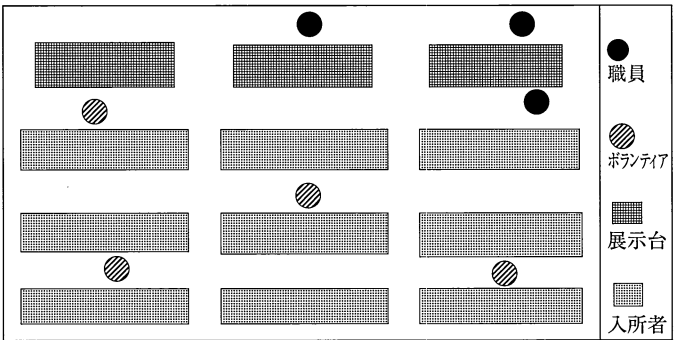


図2 移動展示の基本的な配置

2-4 解説方法

解説は、博物館職員およびボランティアによって行われた。館長は統括、挨拶および説明。館長補佐は事務連絡、進行および記録。学芸員は事前準備と説明。ボランティアは説明補助として資料を手に持って参加者の間に入り込んで実施した（写真1、2）。また、介護保険施設の



写真1 ボランティアによる説明補助

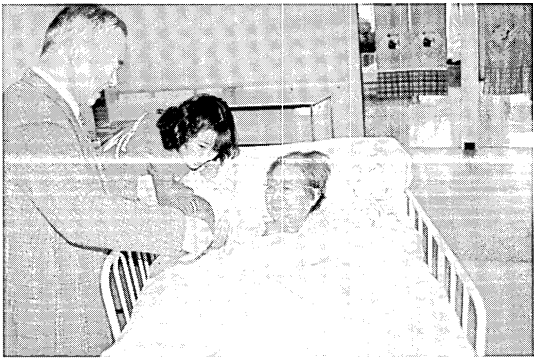


写真2 寝たきりの方への説明

職員は日常業務に加え予定外の事業を受け入れることから、同職員に対しては入所者の安全配慮の他は、可能な限り負担のかからないように配慮した。

説明を行う上で気をつけたことは、①専門用語はできるだけ使わない、②ゆっくりと大きな声で話す、③話しかけるように、わかりやすく丁寧に、④積極的に話しながら資料を手に持って参加者の席へ入り込む、⑤素朴な質問にも耳



写真3 民俗衣装を身につけた学芸員

を貸す、⑥場合によってはジェスチャーを交えるの6点であった。特に⑤については、ボランティアが説明者（職員）に質問の内容を伝え、受け答えをするなど一方的な説明にならないよう配慮した。他に学芸員が民俗衣装を身につけて民謡を唄い、会場の雰囲気を和ませることも試みた（写真3）。

3. 結果および考察

事業終了後、アンケートを行ったところ、5ヶ所の介護保険施設A、B、C、DおよびE（以下、施設A・施設B・施設C・施設D・施設E）から、各1枚ずつの回答があった。参加者の中にはアンケートに回答不可能な方も多ことから、回答者は、日頃から入所者をよく観察していると思われる介護保険施設の職員である。

実施時期については博物館のくん蒸期間に合わせ2月下旬となったが、アンケートの結果、施設A・B・D・Eは5～1段階評価で5の「良い」、施設Cは4の「やや良い」であり、全ての施設において「普通」を上回っていた。実施希望時期についても伺ったところ、施設A「2月」、施設B「2～3月」および施設D「11～2月」が良いとの返答があった。これについては「寒くて雪の多い冬場はどうしても外出を控えるため、入所者のストレスがたまってしまいがちになる。この時期に来て下さりととても良かった」との意見があった。しかし、この時期はインフルエンザ流行の季節でもあり、家族の面会も控えてもらっているとの理由から実施を控えた介護保険施設もあった。このことは、冬場に介護保険施設において移動展示を行うメリットとデメリットが紙一重であることを示している。当館では、平成13年度から臭化メチルによる全館くん蒸とそれにともなう休館日を廃止しており、実施時期を2月に限定する必要が無くなったことから、今後さらに調査を行い、施設の希望に合わせた日程を検討していく予定である。また実施に当たっては、牛博職員と博物館ボランティアにインフルエンザの予防接種を行うほか、体調の悪い職員やボランティアの参加を控えるなど、入所者の健康に対して十分に配慮することも必要である。さらに、実施曜日に関しては、デイサービスの人にも見せたい

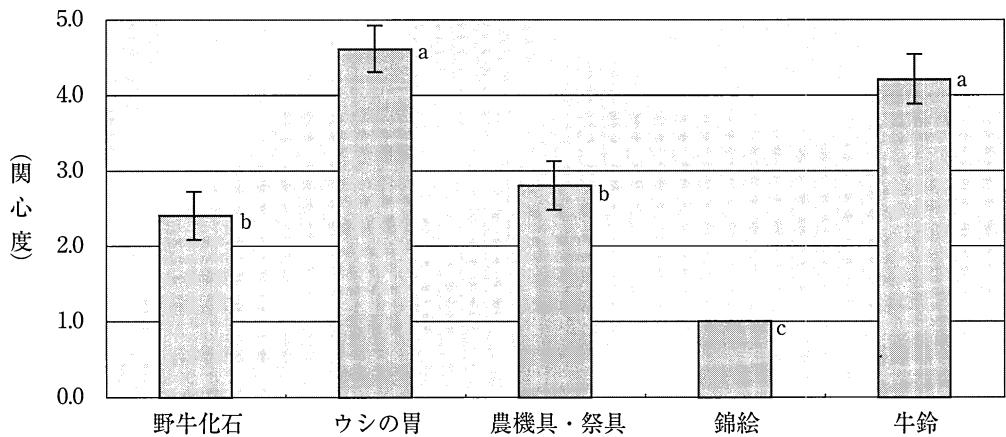


図3 展示資料の関心度

※) a : b, $P < 0.01$; a : c, $P < 0.01$; b : c, $P < 0.01$; a : a, Not significant ; b : b, Not significant

との介護保険施設側からの希望があり、土曜、日曜および祝日を除いた平日に行うことが多かった。これについては、介護保険施設の職員の出勤体制とも関連しているようで、日程を検討するうえで考慮しなければならないことである。

移動展示に用いた資料の関心度を、実施時期と同様に5段階評価していただいた。各施設間の関心度には変動が認められ、そのまま比較した場合、どちらが大きいかわからない誤った解釈を導く可能性があったことから、田中（1999）の方法に従い、値の分散分析を行った注（1）。その結果、各評価の平均値±標準誤差は、野牛化石 2.4 ± 0.27 、ウシの胃 4.6 ± 0.27 、農機具・祭具 2.8 ± 0.42 、錦絵 1.0、牛鈴 4.2 ± 0.42 であった（図3）。これによると、ウシの胃と牛鈴が他の資料と比較して有意に人気が高く、共にグループaを構成した。ウシの胃は「滅多に見たことがない」「手に取って見られたことが良かった」「実物の大きさにびっくりした」、牛鈴は「様々な形と音色に興味を引かれた」「国ごとに明確化されており理解しやすい」との意見が寄せられ、理解のしやすさと今まで見たことのない新しい知識を得たことへの満足感および資料に実際に触れたことがその理由と思われた。胃は人間の体の中にもあることから、自分の今までの知識と関連づけて理解がしやすく、大きさの解る高級アルコール含浸標本と触感が解るシリコン含浸を組み合わせた展示手法が参加者の理解を一層深めたと考えられる。金属製の壊れにくい牛鈴は、触れるだけでなく、手軽に手にとってもらうことも可能であり、寝たきりの人のベッドまで持って行くことができる。また、鈴を首にかけると大胆なジェスチャーを交えた説明も可能である。そして揺ると音が鳴ることから、視覚、触覚および聴覚といった複数の感覚に訴えることができる。ウシの胃と牛鈴の関心度間に有意差は見られなかったことから、これらの資料は、今回用いた資料の中では介護保険施設での移動展示に最も適していた。

これに対してウシの描かれた錦絵は、全ての介護保険施設において関心度が1.0と最下位であった。「大変貴重なものが見られた」「本物を見られたことは良かった」といった意見が寄せられたものの、「弱視で見えなかった」とする意見もあり、細かい図案が見えにくかったことおよび描かれた時代背景などに理解が難しかったこと、そのため質疑もなく説明が一方的になってしまったことなどが興味を持てなかった要因であろう。錦絵は介護保険施設での展示には不向きであった。実物にこだわらず、その拡大コピーを用いたり、描かれている風俗や民俗資料を合わせて紹介するなど、説明の方法によって関心度を高めることが必要である。

農機具・祭具と野牛化石は有意差がなく、ともに中程度の関心度であり、グループbを構成した。農機具はウシが登場する祭りの実演も交えて解説し、笑いも多かったことから、この評価に関しては少し意外であった。これは、祭りの実演が、介護保険施設での慰問で多く行われる寸劇や民謡などと似ており、事業実施時の入所者の反応が博物館の移動展示に独特な反応ではないと介護保険施設の職員が判断したためであろう。一方、農機具は、ほとんどの入所者の人たちが実際に使用した経験のある資料であり、展示した牛乳缶の容量や犁の使い方などをきっかけに、自分の経験を懐かしそうに語る人もいた。施設Eでは、その点を評価して関心度が4と高かった。その他にも、本事業を実施した12ヶ所の介護保険施設のほとんどから、農機具について「事業終了後、普段会話の少ない入所者も会話に入っていた」「家族とも話題になっていたようだ」といった評価が口頭で寄せられた。博物館資料の新しい利用方法として、過去への回想体験を通じて高齢者の生き甲斐や孤独感からの脱却を促すレミニセンスセラピー（回想法）への活用が提唱されているが（安井 2000 pp. 20-25）、当館が位置する岩手県のような農村地帯において、農機具はその素材の一つとして高い可能性が期待された。

バイソンの化石は、大きな角が特徴的な頭蓋骨に触れてもらったが、重いため手に取ることができなかったこと、現在バイソンが日本に生息していないこと、いつの時代に生息していたかなど理解が難しかったことが関心の度を低下させた要因であろう。また、化石とはいえ骨は死を連想させるのか、怖がって触れようとしない人がいたことが注目された。

図3に示したように、この傾向が全ての施設で共通して見られたことは極めて興味深い。すなわち、これらの結果から展示資料は、知識として知っているが見たことのないもの、理解しやすいもの、もしくは、なつかしい「モノ」が好評であった。逆に、歴史的背景などの説明が必要な資料は理解されにくく、展示手法を工夫する必要がある。また資料に触れる、振ると音がでるなど視覚以外の感覚に訴える展示手法が興味を引いたようである。

移動展示全体に対する感想からは、自ら見学に行く施設と思いついていた博物館が、介護保険施設に来園したことに対する驚きと、新しい知見を得たことに対する喜びがうかがえた。

説明の際、注意すべきことは、入所者の中には感情を表現することが難しくなっている人もいることである。一見、興味を示さず、座っているだけの人でも関心を持って説明に聞き入っ

ているので、参加者全員に対して平等に接する必要がある。「入所者が初めて笑った（介護保険施設職員）」といった反応は、そうした取り組みの成果であろう。また、これらの結果から、介護保険施設における移動展示が特に精神的な介護の面から少なからず効果があることが推察された。「数年後にまた実施してほしい」といった希望も多いことから、今後は資料の選定および会場の再検討なども介護保険施設と協議しながら事業を発展させていく必要がある。そのためには、入所者全員に対して行う移動展示ではなく、対象者を絞り込み目的を設定するなどきめ細かな対応が必要である。

おわりに

冒頭に述べたように、博物館は「学問の自由」「教育を受ける権利」「勤労の権利」を法の下の平等に基づいて国民一人一人に保証する機関である（遑見 1993 pp. 5-17）。本論文では介護保険施設における牛博の取り組みの紹介と博物館資料についての考察を行ったが、山本（2000 pp. 43-48）が指摘するように、博物館に足を運ぶことのできない在宅要介護者は、介護保険施設入所者の倍以上となっており、これらの人々を対象にした取り組みが今後、重要性を増すと思われる。牛博の移動展示は、入所者だけでなくデイサービスの方々も参加できる日程と時間帯を設定し、多くの在宅要介護者の参加を得たが、さらに一歩進んだ取り組みが必要であろう。

一方で、筆者の一人は、博物館の資料調査で個人の自宅にうかがった際、お年寄りが目に涙を浮かべてその資料の思い出を語る様子を目にしている。さらに、町内の公民館では「昔を語る会」を開催するなど機会を設けて独自の調査を行っている。博物館や公民館などのこのような日常的な活動も在宅介護を受けているお年寄りの生き甲斐や人生回顧（回想法・ライフレビュー研究会編 2001）に繋がっていくと思われることから、今後、単に資料収集や情報の記録を目的とするだけではなく、町の福祉担当職員と協議するなどして博物館と老人福祉の連携を探っていく必要があると考える。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、アンケート調査に快くご協力いただいた介護保険施設職員および事業実施にご協力いただいた牛の博物館ボランティア・キャトルサンクの皆さまに感謝申し上げます。

引用参考文献

回想法・ライフレビュー研究会編 2001『回想法ハンドブック Q & A による計画、スキル、効果評価』中央法規出版。

金山喜昭 1998「老人ホーム移動博物館の実践とその意義づけ—高齢化社会における博物館の新たな試

-
- みー」博物館研究第33巻第6号 日本博物館協会 pp. 30-35.
- 竹内有理 2001「博物館利用者の開拓—社会との関わりの中かで—」文環研レポート第15号 文化環境研究所 pp. 1-8.
- 田中一栄 1999 『計量生物学—生物統計の基礎と演習—』三共出版.
- 山本哲也 2000「高齢社会と博物館」『現代博物館論—現状と課題—』（加藤・鷹野・西・山田・米田編）雄山閣出版 pp. 43-48.
- 安井 亮 2000「高齢者による博物館管理用の可能性—海外での収蔵品を使ったレミニセンス・セラピー（回想法）の試み—」Cultivate第12号 文化環境研究所 pp. 20-25.
- 邊見 端 1993「公立博物館論—公共博物館への道—」博物館学雑誌第18巻第1号・第2号合併号 全日本博物館学会 pp. 5-17.

注

- (1) 分散分析法 (Method of Analysis of Variance) : 3つ以上の数値の平均値を一括比較してそれらの間に有意の差が存在するか推定する統計学的手法。